

復興地における絵本と音楽のコラボレーションイベントの チャリティーイベント実施者の研究

立命館大学大学院 人間科学研究科
博士課程後期課程 中野 修



1 背景と目的

災害によって甚大な被害を受けた復興地において、増田梨花氏とその仲間たちによる、「絵本と音楽のコラボレーションイベント—笑顔の花を咲かせよう—」が行われている。立命館大学においては、震災復興支援プロジェクトが実施されており、そのプロジェクトのなかでも、このイベントは行われている¹⁾。

「絵本と音楽のコラボレーションイベント」は日本全国で行われており、これは、復興地へのチャリティーイベントである。イベント実施者が復興地に実際に出向き、復興地の方々と関わり合い、イベント参加者らも一体となり、実施されている。

「絵本と音楽のコラボレーションイベント」の実施内容の詳細としては、絵本を見開き1ページずつ、大きなスクリーンに映し出し、そのページごとに読み手が交互に絵本の台詞を読み合う、『読み合わせ』がおこなわれる。同時に、その絵本のページの場面にあった音楽が、生演奏で奏でられる。音楽は、バンドの演奏するジャズや和太鼓、ハープやピアノ、コーラスなど、様々である。絵本も同様に、様々な本が使用されている。わたせせいぞう作の「サンタ・サンタ・サンタ」や、和太鼓とともに演奏される「アフリカの音」、一人ではなく複数の読み手が参加する「11 ぴきのねこ」などがある。

音楽演奏を行う学生ボランティアについては、洗足学園音楽大学が「洗足学園音楽大学・短期大学 被災地支援推進チーム」を立ち上げ、復興地での演奏活動を継続的に行っている²⁾。また、桐朋学園大学は「Heart to Heart Concert」というコンサートを復興地でおこなった。近畿大学吹奏楽部の学生らも2011年度にチャリティーコンサートをおこなっている³⁾。

絵本の読み聞かせのボランティアは、仙台白百合女子大学や、青山学院大学、東北学院大学の学生らがおこなっているとある⁴⁾⁵⁾。

このように、復興地に支援に向かう学生ボランティアは多いが、絵本と音楽の両方を合わせたイベントを行っている団体はない。

本研究では、ボランティア、イベント実施という復興活動について、実施者、つまりボランティアに向かう側がどのように感じているかということと、実施者が活動をおこなった経過について考察する。そのことによって、今後、ボランティアに向かう側が、事前に考えておくことや、復興地の方々により心理的に寄り添うために必要なことについて学び、理解するというところに、本研究の意義があると思われる。そのため、本研究では、実施者の、イベントの実施前、イベントの最中、実施後に感じることを、そして、絵本と音楽が実施者にどのように役立っているかについて考察する。

(1) 絵本について

小寺ら(2005)は、「登場人物になりきることなどにより、自分の未知の世界に出会うことができ、想像上の世界に思いを巡らすこともできる」と絵本の良さについて述べている⁶⁾。

松居(2001)は、「耳から聞く言葉が絵をどんどん動かす、広げていきます。」「自分で絵本の物語の世界をつくる体験をする。そういう体験が実は絵本の本質に触れることです」と述べている⁷⁾。また、Maria & Carole(2000)は、「絵は言葉の意味をより完全に増幅するか、言葉が絵を拡大する」「(絵と言葉の)異なる情報がより複雑なダイナミックを生み出す」と記しており、絵本には、絵と言葉の相乗効果があるという

ことを述べている⁸⁾。

また、増田(2011)は、絵本の読み合わせを科学的に分析したところ、鼻部皮膚温が上昇する、心拍数が落ち着くという、いわゆるリラックス状態になるということを示している⁹⁾。増田(2018)は、小児病棟で、子どもとの絵本の読み聞かせと、互いに絵本を読み合うという、読み合わせをした活動をおこなっていた。その時に、絵本は、あらゆる場面の疑似体験が出来るツールと感じられた経験があると述べている。そのため、実際に体験することは出来なくとも、絵本を通して、日常の疑似体験をすることが出来ると述べている¹⁰⁾。

秀(2018)は、幼児教育現場で絵本を使った研究において、読み手は、読み聞かせに対する理解力、絵本に対する理解力が重要と述べており、さらに「一冊の絵本の持つ力とは一つではないということになる。言い換えれば、読み手さらには読み聞かせを受ける子ども達の力によって、その3者による相互作用は無数のものとなる。」と読み手や聞き手の相互作用によって、絵本の理解がさらに進むとしている¹¹⁾。

(2) 音楽について

下茂ら(2008)の研究では、音楽の科学的な効果としては、近赤外光による脳血流測定によって、受動的、能動的音楽聴取ともに、リラクゼーション効果があるということが分かっている¹²⁾。吉積(2008)は、音楽のリズム・アンサンブルに着目し、「自分の演奏音と他者の音感覚とを合わせるために、視覚、聴覚触覚、身体感覚などを活用したノン・バーバルコミュニケーションにより、他者との交流を促すことができると考える。」と述べている¹³⁾。また、星野(2008)は「音も音楽も、身体の細胞(聴覚も聴細胞や神経細胞の働き)や内分泌に影響するレベルから、抽象的メッセージ性・イメージに作用するような心理的レベルまで、幅広く人間に働きかけ多くの作用を起こす現象と推測されます。」と音楽の可能性について記している¹⁴⁾。このように、音楽はいまだ解明されていない部分もあ

るが、人間に多様な影響をもたらすツールであると考えられている。

(3) 絵本と音楽の関連

河合(2001)は、前述の絵本『アフリカの音』について、「音がしていないようで、音が満ちているのが、よく耳をすましたら聞こえてくるのではないかと述べており、絵本と音楽の関連性、絵本の中に音楽が存在していることを記している¹⁵⁾。

小島(2009)は、絵本と音楽の研究の中で、「何らかの反復と変化を含む絵本を用いると、一つの絵本から様々な音楽をつくることができた。」と述べており、絵本から思い描かれるイメージと、音楽との相互作用について明らかにしている¹⁶⁾。

このように、絵本と音楽は密接な関係があると考えられ、それらが交わり合うことで、さらに奥行きのある、絵本と音楽の世界が広がっていくのではないかと推察される。

2 方法

(1) 対象者

対象者は、立命館大学大学院の対人援助を専門とする大学院生10名、声優1名、ピアニスト1名の計12名。男女比は、男性3名、女性9名である。

(2) 調査時期

2018年11月。復興地における「東日本家族応援プロジェクト 絵本と音楽のコラボレーションイベント」は、2012年から行われている。本研究のデータは、2018年度立命館大学大学院「東日本家族応援プロジェクト チーム石巻」に寄せられた、イベント実施者からの感想である。

(3) 分析方法

分析は質的分析法である、KJ法を参考にして感想を分類し、図式化した(図1)。今回はアイデアを生み出すことが目的ではなく、データの整理統合が目的

であったため、図式化までを行った。まず、感想を断片化し、コード化した。その後、コードを小カテゴリーにまとめ、次に中カテゴリーにまとめた。その後、さらに大カテゴリーにまとめた。そして、相関図を書き、それぞれの関連性を整理した。一連の流れは、筆者と心理学を専門とする大学教授である臨床心理士の計2名で行った。

(4) 倫理的配慮

立命館大学大学院の増田梨花教授から、学生の感想のデータ化、および、執筆の許可をいただいた。

3 結果

小カテゴリーが 100 個、中カテゴリー12 個、大カテゴリー5 個が抽出された。

小カテゴリーには、「読み手も音楽があることで雰囲気や掴めて、感情を込めやすかった」「対象となる「絵本」の世界観を、音楽を用いることで『共有』し新しい世界観を作ることが、短時間にできる」「絵本の読み手となった参加者は、それぞれ自分らしく読み方や手振りなど工夫しながら表現している様子も見られました」「『読み合わせ』『読みあい』は決して『一人で読む』ということではないということだった。」「目の前の全員に向かって読む」ということでもないと感じた。」などがあつた。

中カテゴリーには『絵本と音楽による実施者への効果』『絵本の効果を増幅させるもの』『音楽の効果』『実施前の不安』『実施者の成長』『実施者のこころの動き』『実施後の気づき』『仲間との協働』『きっかけ』『今後について』『復興地への想い』『被災者の語りを聴いて』の 12 個があつた。

大カテゴリーは【被災者の語り】【実施者の不安と成長】【絵本と音楽の効果】【実施者の気づきと実感】【実施者の前後の気持ちの変化】の 5 つがあつた。

4 考察

【被災者の語り】

『復興地への想い』『被災者の語りを聴いて』

小カテゴリーには「現在残っている建物や当時の写真を見たときは言葉を失いました」「被災の現場に実際行ってみて、自分でその土地に行くということに興味があるということがよくわかった」などがあつた。

これは実際に復興地に赴かなければ、チャリティーイベントを通して、現実に復興地で起きていたこと、被災者の体験を聴くことが出来なかったことを表している。

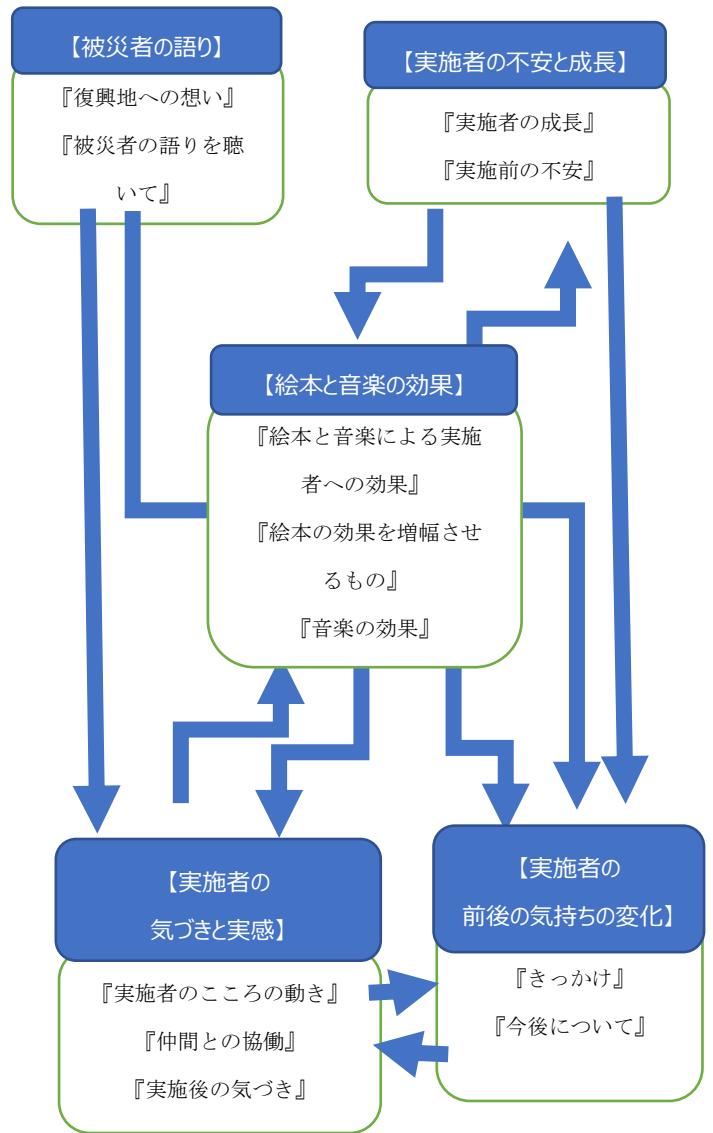


図1 (図式化・大カテゴリー、中カテゴリー相関図)

この体験は、学生たちにとって、被災者の気持ちに寄り添う、という気持ちを育むために必要であったと思われる。また、体験したことを聴くことにより、「自分が考えていたことよりもさらに凄惨なことが起きていたという現実を知った」という学生もいた。これは対人援助職として今後活動していくために非常に重要な感性を養うことにも繋がると考える。対人援助職は、人とのかかわりが大切になるため、実際に体験する、体験して理解するということが非常に大切となる。復興地を訪ねるということは、傷ついた方々のところに触れるという場面もあり、復興地に向かう側は、一種の覚悟のようなものが必要になる。

【実施者の不安と成長】

『実施前の不安』『実施者の成長』

実施者のイベント実施前には、小カテゴリーには、「今回のプロジェクトでは、自身が読み手側にまわることになって楽しみな反面、生演奏に合わせて絵本を朗読するという点、読み聞かせの相手が大人であるという点で不安もあった」などがあった。他には大きな声が出ない、参加者全体のまとまりが感じられなかったなど、イベント実施前の不安がみられた。実際に復興地で役にたちたいという気持ちがあり、イベント実施者として参加したが、体験前には、自分が読み手として務まるだろうかという不安が伴ったようである。具体的には、マイクを使わずに生の声を伝えるための声の大きさによるものが多かった。学生だけではなく、指導するプロの声優も不安を感じていたようである。

しかし、イベントが始まると、声が届いたという反応を参加者の様子を生で感じ、自信をもって実施することが出来たようである。学生の成長が他の実施者からも感じられたという内容の記述もあった。

参加者が実施者を見るように、実施者も参加者の反応を見ることで、相手がどのように感じているかを、察知する。これは、イベントの場を両者が共有しているということであると考えられる。

さらに、継続的な練習も成果につながったようであ

る。このことから、イベントを実行するには、事前の準備が十分に必要になるということが考えられた。

【絵本と音楽の効果】

『絵本と音楽による実施者への効果』『絵本の効果を増幅させるもの』『音楽の効果』

小カテゴリーには、絵本や音楽の効果としては、「絵本に音楽をつけることで、深まりが違うため、大人も充分に楽しむことができたのだと思います」「読み手も音楽があることで雰囲気がかめて、感情を込めやすかったです」「相乗効果のように、私もつられて絵本の世界に引っ張ってもらって、読めた」などがあった。絵本を読み合わせるものの効果だけではなく、音楽があることによって、さらに臨場感が増す。そして、絵本の世界が理解しやすくなり、さらに感情を込めることが出来る。それによって、絵本の世界を、実施者が表現しやすくなるということが推察された。

また、他の小カテゴリーには「音楽が静止画の絵を動かす」というものもあった。このことに関しては、さらに、生演奏ということも理由としてあげられるだろう。生演奏では、音の響きがより直接的に伝わると思われる。臨場感があり、絵本の読み聞かせと音楽が合わさり、視覚、聴覚を同時に刺激することが出来るからであると考えられる。

【実施者の気づきと実感】

『実施者のこころの動き』『仲間との協働』

小カテゴリーには、「チーム石巻は、『素直に、本物を見て、様々な状況を受け止め、みんなでつながる』をテーマに掲げ、活動を行った」「キャラクターのパートをわけて読み合うことや、音楽と合わせることで興味や関心、または、さっきとは違う音楽になった、次はどうなるんだろう、と想像力を働かせる力が聞いている人にも生まれ、より絵本への関心が高まるのではないかと思いました」「障がいをお持ちの方もそうでない方も関係ない。社会的地位も名誉もすべて関係なく、すべての人の間にあたたかい架け橋として存在

しているのが絵本であると再確認できた」があった。絵本と音楽のコラボレーションイベントの実施者だけではなく、地域の人たちとも連携を取り、このイベントは行われた。イベント実施者と現地の仲間という、相互が助け合う関係によって成り立っており、復興地の仲間がいなければ、イベントを行うのは難しかった。そして、実施者の気持ちの変化としては、実施後に、様々な方たちとの気持ちの架け橋となるという、絵本というツールの良さについて再確認出来たということがある。

【実施者の前後の気持ちの変化】

『きっかけ』『実施後の気づき』『今後について』

小カテゴリーには、「最初は単純に『東北に行ってみたい』という気持ちだった」「ボランティアがしたい！と思い参加させていただいた活動ですが、毎回、色々な意味で勉強をさせて頂いています」とこのように、きっかけとしては、復興地へ行きたい、復興地で役立ちたいというボランティア精神から発生しているものがいくつかみられた。

しかし、実際にイベントを行った後に、実施者が感じた変化としては、「聞き手の方々も集中して聞いてくださり、中には絵本のオチの部分で声を出して笑ってくださる方までいました」「これら施設の方々の楽しみ、生き生きとした表情から、笑顔になっていただくということも支援活動の一つであると実感した」などがあった。参加者から、絵本を見たり、音楽を聴くことで笑顔を見せてもらった。「また来てね！」と言ってくくださる方もいた、と復興にむけて頑張っている方々から、逆に元気をもらったという学生がほとんどであった。これは、学生たちにとって予期せぬ出来事であったと思われる。復興地の方々の力になりたい、というボランティア精神について、さらに別の角度から考察していくきっかけになった。

また、今後も、イベントの実施者として参加したいというものが多かった。これは、絵本と音楽の体験、参加者との交流が実施者本人によるこびを与えたか

らである。そして、学生である、イベント実施者自身の貴重な学びになったのではないかと推察される。

5 総合考察

横山（2008）は、保育の場での、絵本の読み聞かせの意義は、「1. 保育者（読み手）と子どもたち（聞き手）の安定した信頼関係の上に積み重ねられる共有体験（一体感）であること、2. 絵本と子どもの生活の連続性が可能となる、読み聞かせであること」だと述べている¹⁷⁾。

秀（2018）は、絵本の読み聞かせの意義を次の5点にまとめている。それは、「1. 絵本そのものに親しむ、2. 想像力を豊かにする、3. 言葉の楽しさ・美しさを感じる、4. 共有体験を通じて感性を磨く、5. 生活と結びつける」である¹⁸⁾。しかし、筆者はこのことは幼児期だけにとどまらない、また、読み聞かせではなく、読み合わせでも同様、さらに大きな影響を実施者、参加者に与えていると考える。なぜなら、本研究の結果では、大人も対象としており、そこにおいても同様の効果が得られているのではないかと感じられたからである。

実施者が絵本そのものを楽しみ、読み合わせをする。そして、その読み合わされる絵本を十分に味わうということが、参加者を楽しませる、という心理的な循環が起きているのかもしれない。これは、参加者と実施者の心理的な『つながり』を作っているということであると考える。

想像力という観点から考えると、絵本や音楽は視覚、聴覚に直接的に働きかけるものである。音楽には振動があり、身体全体で感じる事が出来るツールでもある。それらの感覚を研ぎ澄まして、絵本の世界により深く入っていくことが出来る事が推察される。そこから、実施者、参加者の想像力が広がっていくと考えられる。絵本や音楽にはそのような利点があると思われる。

共有体験を通じて感性に働きかけるという点では、このイベントにおいては、被災者の方々への配慮とし

て、水や海などが登場する絵本は極力避けて選定されている。絵本は心理的な投映を引き起こすものであるため、被災体験などに触れないようにするという被災者の方々への心配りである。

このように、心理的な面に寄り添うことが、ボランティアに向かう側は考えておかなければならない事柄であろうと思われる。

言葉の楽しさ、美しさという点に関しては、「11ぴきのねこ」という絵本では、同じ言葉が繰り返されたり、『ねんねこさっしゅれ』など歌、すなわち音楽を感じさせる場面があり、聴覚的にリズムを感じる内容となっている。そのような点は、読み手である実施者にも、読む楽しさを与えるのではないかと推察される。

共有体験という部分では、絵本の読み合わせの良さが非常に活かされていると考える。読み合わせは一方的なものではなく、『私』と『あなた』が双方向的に関わり合う行為である。それは、実施者との関わり合い、実施者と参加者の関わり合いが円環的に行われていると考えられる。

本イベントを通して、被災者の方々にかかわるといふのは、実際に復興地を訪れ、言葉を交わすことだけではなく、実施者も参加者も、絵本と音楽の世界という、一種、非日常的な世界をともに味わうということである。参加者のそばに心理的にそっと寄り添うだけではなく、実施者同士も相手の呼吸を読み、台詞、音楽に耳を傾けるということで、実施者同士も支え合う、寄り添い合っていると推察されるからである。

実施者側が読み合わせにおいて感じていることが、参加者に伝わっているかということは、さらに今後、研究が必要であると思われる。しかしながら、実施者から得られた結果を見ると、実施者側はイベントの実施において、参加者も同じように感じている点があると推察される。実施者の感覚的、心理的働きに、多くの共通点があるのではないかと考える。

初めて復興地へ訪れた時、被災者から当時の話などを聞いた時、実施前の不安、実施後の気づきと喜びなど、復興地のためになるだけでなく、学生自身の成長

をも促している。無論、遠方から復興地への支援を行うことも可能である。だが、復興地へ直接向かうこと、自身で感じることで、そして復興地の方々とふれあうことが、実施者、つまりボランティアに向かう側にはとてもかけがえのない体験になるのではないだろうか。そして、イベントの実施においては、実施者も参加者とともに『楽しむ』ということが、参加者に良い影響を与えているのではないかと推察される。

今後は、参加者からの声をまとめ、さらに絵本と音楽のコラボレーションイベントの良さ、ボランティアが関わることによる参加者の想いや、参加者に与える影響について考察していきたいと考えている。そして、実施者と参加者との双方向的な関わりについて、さらに考察が深まることにより、今後、復興地に向かおうと考えているボランティアを、今まで以上に育成することが出来るのではないかと考える。ボランティアに、実施者、参加者の双方の心理的プロセスを知ってもらうことは、復興活動を進めるうえで、有用であると考えられる。

参考文献

- 1) 立命館大学 東日本家族応援プロジェクト (チーム石巻)
<http://www.ritsumeai.ac.jp/file.jsp?id=401770>
- 2) 洗足学園音楽大学 東日本大震災への支援活動/対応
<https://www.senzoku.ac.jp/music/saigai/19765>
- 3) 近畿大学 復興支援アーカイブ
<https://www.kindai.ac.jp/about-kindai/social-activity/earthquake-east-japan/archive/>
- 4) 仙台白百合女子大学 東日本大震災 関連情報
http://sendai-shirayuri.ac.jp/earthquake/volunteer_activities.html
- 5) 東北学院大学 ホームページ
<https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/volunteer/archives/301>
- 6) 小寺玲音・瀧川光治・玉置哲淳 (2005), 「保育実践における絵本の持つ意味に関する考察—幼稚園教育要領・保育所保育指針および保育内容『言葉』のテキスト類の比較から

- みた保育者の役割一」大阪教育大学幼児教育学研究室 25, pp. 31-45.
- 7) 松居直(2001), 『絵本の力 絵本の中の音と歌』 岩波書店 pp. 53-54.
- 8) Maria Nikolajeva & Carole Scott (2000), The Dynamics of Picture book Communication Children's Literature in Education, Vol. 31, No. 4, pp. 225.
- 9) 増田梨花(2011), 『「今、ここ」で人間関係をつなぐ絵本の活用 演習編 一絵本を活用したワークショップの実践例 一』北陸学院大学臨床発達心理学研究会 出版グループ
- 10) 増田梨花(2018), 『絵本を用いた臨床心理面接に関する研究—不登校生徒に対する読み合わせ面接を通して—増補版』晃洋書房 pp18.
- 11) 秀真一郎(2018), 「絵本の読み聞かせにおける一考察 一感情の有無からくる影響—」『吉備国際大学研究紀要』第 28 号, pp. 1-11.
- 12) 下茂円・菅生恵子・揚原祥子・杉田克生・石井琢郎・岩坂正和(2008), 「NIRS 計測による脳血流パターンを指標とした音楽のリラクゼーション効果の評価」『千葉大学教育学部研究紀要』第 56 巻, pp. 343-348.
- 13) 吉積明代(2008), 「中学生の集団凝集性と自己肯定感への音楽療法の効果—竹楽器と和太鼓を活用したリズム・アンサンブルを通して—」『九州大学心理学研究』9, pp. 193-203.
- 14) 星野悦子(2008), 「音楽療法とは何か—音楽の根源に備わる多様な力の利用—」『日本音響学会誌』64 巻 第 8 号, pp. 468- 474.
- 15) 河合隼雄(2001), 『絵本の力 絵本の中の音と歌』 岩波書店, p. 28.
- 16) 小島千か(2009), 「絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき」『山梨大学教育人間科学部紀要』第 11 巻, pp. 115-125.
- 17) 横山真貴子・水野千具沙(2008), 「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義—5 歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から—」『教育実践総合センター研究紀要』第 17 号, pp. 41-51.
- 18) 秀真一郎(2018), pp. 1-11.